

第1章 理化学研究所STAP細胞事件とは 15

- (1) 理化学研究所の歩んだ歴史 16
- (2) 野依良治氏の理研理事長就任と、理研の大膨張 21
- (3) STAP細胞問題の処理と「海軍乙事件」 25
- (4) 遺伝子研究の盛況の原因 29
- (5) 権威ある学術誌『ネイチャー』の正体は商業主義 34
- (6) アクセス・フリー学術誌の急激な台頭と、『ネイチャー』の焦り 38
- (7) 悪質なアクセス・フリー学術誌の乱立 43
- (8) 学会長が論文捏造を戒める異常事態 50

第2章 研究者はなぜ、データを捏造するのか 55

- (1) 文部科学省による大学の独立行政法人化の強行 57
- (2) 学問の自由を蹂躪された国立大学 60
- (3) 政府・産業界の使用人と化した大学研究者 64
- (4) 米国を模倣した欠陥だらけの研究費交付制度 66
- (5) 過大な研究費を年度内に使い切り、成果をあげる圧力 73
- (6) 研究者の評価を決める無意味極まるインパクトファクター 80
- (7) 研究者をデータ捏造に走らせる四つの理由 84

第3章 明治時代の生命科学の巨人たちはいかに活躍したか 91

- (1) わが国への科学技術の導入に果たした大学の役割 93
- (2) 明治時代に現れた巨人①——高峰譲吉 97
- (3) 明治時代に現れた巨人②——北里柴三郎 102
- (4) 明治時代に活躍したその他の人々 110
- (5) 異形の科学者、野口英世 116

第4章 近年のわが国の生命科学の沈滞

123

- (1) 明治時代の伝統は受け継がれたか 125
- (2) わが国の分子生物学者の沈滞 129
- (3) わが国の研究者を矮小化させた学部制と定員制 135
- (4) 有力教授たちによる研究費の恣意的な身内への配分 140
- (5) 研究者のトレーニング体制の崩壊 144

第5章

科学史上に残る論文捏造

151

- (1) 科学史上の天才もデータの改ざんを行なった 153
- (2) 意外に寛大な、米国のデータ捏造に対する処置 158
- (3) 米国の名門研究室で起こったデータ捏造事件 162
- (4) マサチューセッツ総合病院で起こった論文捏造事件 168

第6章

分子遺伝学の歴史と、今後の目標

183

- (5) 米国以外の国で起こった捏造事件 171
- (6) 論文捏造は学問の進歩を阻害するか 178

- (1) 分子遺伝学を開拓した二人の学聖 185
- (2) 分子遺伝学の発展と核酸の二重らせん構造の発見 191
- (3) セントラル・ドグマの成立と、その先にそびえる壁 194
- (4) 研究者を商業主義と政治に巻き込んだヒトゲノム解読計画 198
- (5) 山中伸弥のiPS細胞の開発と政府の反応 203

第7章

わが国の生命科学の滅亡を阻止するには

209

- (1) 見せかけにすぎない競争的研究資金を再検討せよ 211
- (2) 欧米に例を見ないお粗末、不公正な研究費申請審査法を改めよ 215

- (3) 研究者を悪事に走らせる、研究費の単年度会計制度 218
- (4) 再生医療分野への偏った研究費配分を改めよ 224
- (5) 筆者の研究を通して見た、わが国の生命科学分野の不毛化 228
- (6) 研究不正防止の提言書についての感想 243

おわりに 248

主要参考文献 252